



近世說美少年錄

八編

四



~ 13
3567
39



門 へ 13
 號 3567
 卷 39

童子訓卷之二十四

東都 曲亭主人人口授編次



渾不似と辨して防守信宿と移ま
 小雪山名を竊て巧小悪と資

却説韓錦樞二郎ハ當日鏑野郡司範的の弟よりかゝりまふけといふ事彦八
 重作も出迎へ。那里の首尾を請問す樞二郎答てそのまふ就てて話説
 尋らり大江峯張雨君子の意見をもせむ下とを。躬て閑室に招け集へて。櫛高
 鏑野範的の。樞二郎ハ對面のより他がいつこの顛末並鬼ハ劍昔三鐵持
 限ハの爲体且坐角力の時をも。送る告て亦ら。彼刀袷に左ふ右ふ。後
 少女のこふ就てて人の虚説と信容けん。咱を疑ふ心あり。されとも件の一條ハ
 情慾の送恨のこふ。送る。夏る。わ。陽。明々地。おられねとも。肚裏。料の

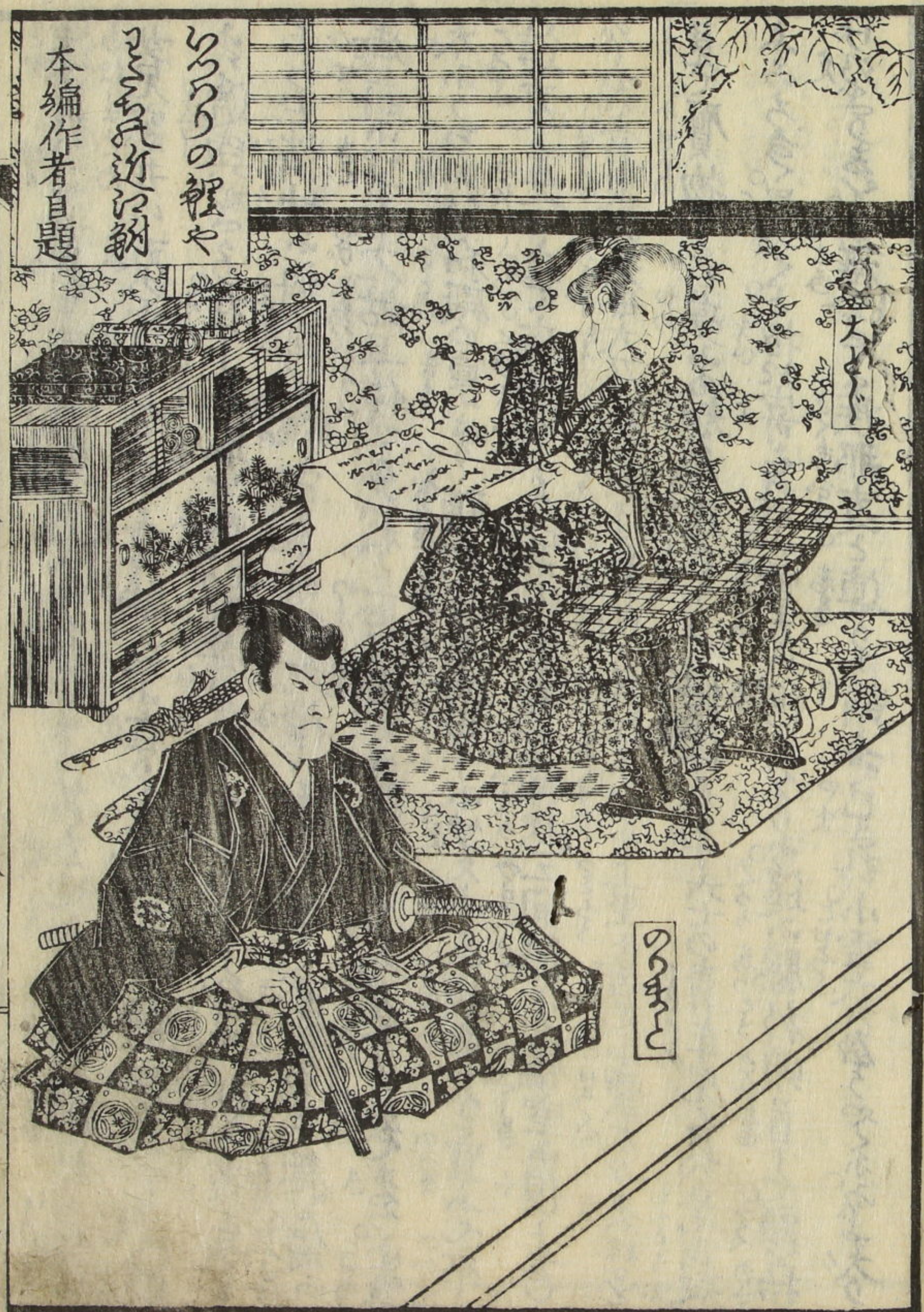
早稲田 大學 圖書館
 昭 34.6.3 樊
 藏 書

して今愛と共侶の宿りを極く思ひぬる。那里へ赴たぬ御導守の我
弟八重作とまのまへ。あの愛を任せぬ。とられて李彦沈吟と昔君世を
去りぬ。憑心からぬ世回難面だの命を猶人まれば泥會ふ。ゆり上の
進退を已く隨意擇むの要る。左も右も計せぬ。とよふ榎二郎歎いて。這里
と那里の同國なれども。鑛野殿の采地なれば。是安身の一也。絶ぜ安否と訪んぬ
日易り畢。竟這里お置まの。さるお殊る。よくもあらまか。との慰むれば。成勝も
含笑る。通能と面を注し。俱おひき。介らぬ。我們も。妙義。榛名。参詣が
てら。その和田生を訪ま。欲ま。俱お紹介と願ふ。而已。の。茶。榎二郎苦笑ま。
西君子の障りも。さる。とて。や。並く。捨。俱おひき。と。ゆる。やら。の。と。本。意。なり。
と。咳。と。李彦。然。然。と。と。慰。めて。一。談。既。お。定。る。上。の。扱。も。も。召。下。せ。て。あ。ら。う。ゆ。り。
せ。い。え。扱。も。扱。も。と。呼。よ。ま。る。聲。より。先。お。心。を。あ。ら。う。扱。も。既。お。次。の。間。お。居。り。

え。う。り。顔。お。出。て。東。ぬ。り。と。李彦。猶。も。喚。近。つ。て。休。那。里。お。在。ら。ぬ。衆。議。の。趣。を
あ。ら。う。ん。明。日。の。宿。り。と。易。ま。く。欲。ま。も。比。皆。主。人。の。好。意。お。よ。ま。し。且。て。其。禮。を。宣
あ。ね。と。の。お。扱。も。の。心。と。ま。る。榎二郎。も。あ。ら。う。向。ひ。て。その。歎。び。と。演。る。程。お。押。繪。の
渾。不。似。と。携。て。納。戸。の。方。より。出。く。ま。る。兄。榎二郎。お。自。ら。あ。ら。う。い。ぬ。る。日。お。あ。ら
立。合。阪。より。賓。客。達。を。伴。ま。て。か。の。東。ま。あ。ら。う。折。お。彼。轎。夫。も。茶。店。に
媪。お。憑。心。れ。ら。と。と。の。樂。器。を。空。轎。お。う。ち。載。て。の。と。ま。て。ゆ。り。と。云。云。と。告。ぐ。奴
家。お。憑。心。れ。ら。と。と。の。折。り。支。敏。系。と。て。死。身。お。告。る。お。暇。を。け。れ。が。を。儘。架。棚。へ
藏。め。置。し。と。ち。た。れ。る。鈍。き。と。然。る。と。方。僅。の。團。坐。の。商。量。と。洩。せ。し。る。
同胞。お。も。異。ら。ら。ぬ。扱。も。少。女。を。留。め。ぬ。と。餘。波。と。惜。む。心。ら。ぬ。の。樂。器。は。と
あ。も。思。ひ。ぬ。り。の。て。ま。の。あ。ら。う。今日。お。及。び。一。名。用。の。罪。と。饒。ま。さ。ぬ。い。存。と。い。ひ。く。憑。心
ま。渾。不。似。を。榎二郎。受。命。り。て。あ。ら。う。言。ま。る。死。物。と。ぬ。れ。とも。今日。ま。く。咱。も。言。ま。る。

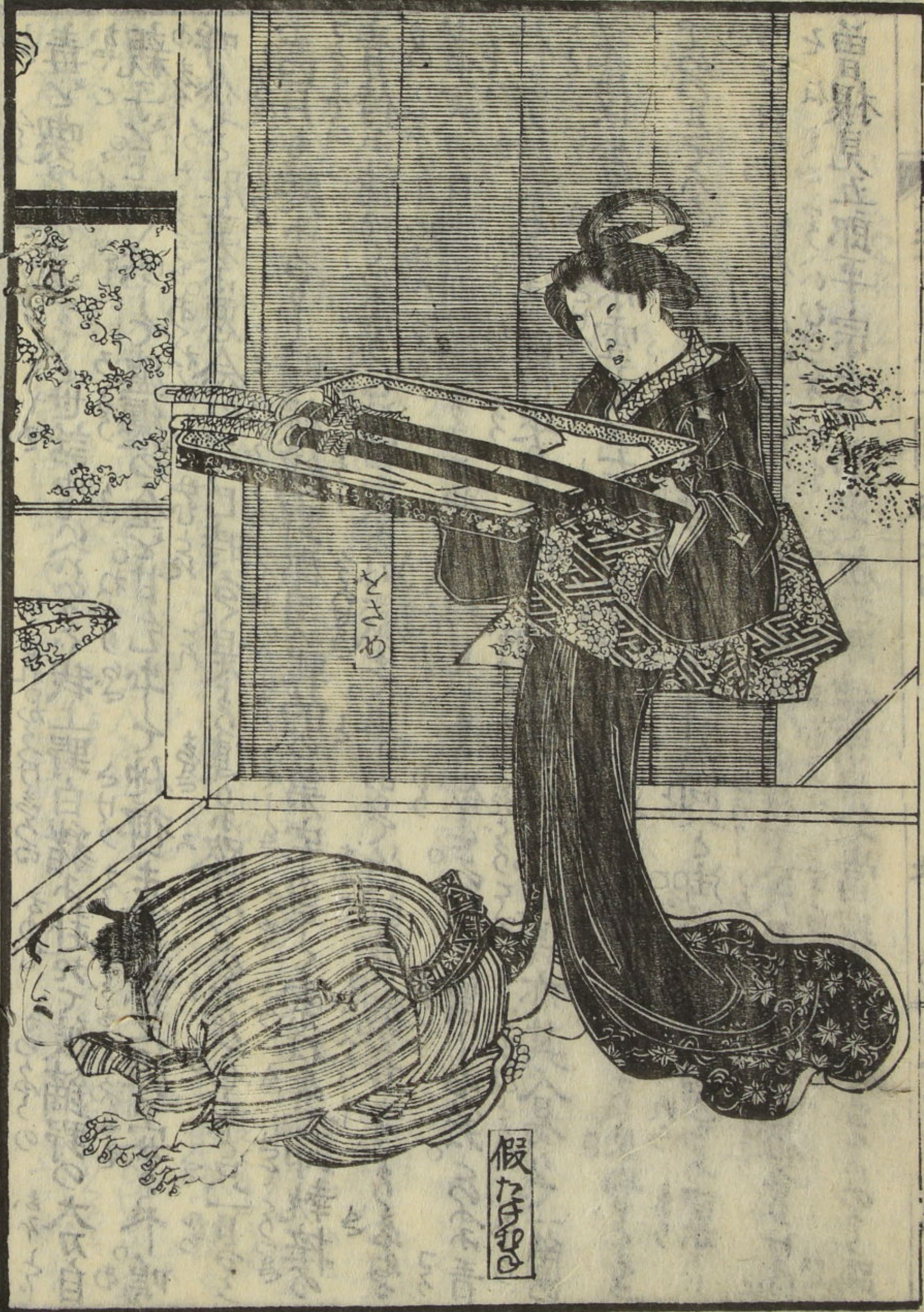
予の念入過るる宿用をりまじ。以後を吃と慎みねと叱り呵々として笑ひて
喃防守先生あやむい身日立合阪也。這渾不似と彼の樂器を被茶石の
貽置て立まがりぬひ一开が迹を。咱が云々と知り世の功に這渾不似の
其身の所藏をけり。這那人の認りたる其頭もろも棄措けま。其身の
か我恥と思ひおけぬ。茶言の温ふ然とるの錢も合らむと復しとり來
亦復旅宿の慰種不似。ゆきと説示し。指を渾不似。季子君を
ら受會りて开る又思ひ自まら主人の用心謝まら堪ら。這渾不似のぬる比
我身よの驛の客店の逗留のり料らむも見おして購亦めりしより。福鬼
父女の身小負縁りて終る這渾不似を。袖とるの身もふるより。後思ひ
若し自性の渾不似を和訓の讀み即ちておるを。わが我是とて然りも
旅宿の徒然と慰めんと。思ひける。初一念の渾不似亦只まのりのとらして

たれ彼煤の兒と憎しとの思ひ。初一念の渾不似再會のり同
考ふれ其人の我故明輩同貫叟の家子也。親族も優も資助も還ら
然れ又我の権は首見ぬ。故御と感ひわし。八九松と麻苺も。只は信の
隱宅とと糸巡りし忠心の親ら。渾不似は遊事跡も。其墳墓を
拜まら。身の遣る方のむらり。主人の節美も慰め。猶逗留もてぬり。わ
る。語を思ひ。送の誠心。渾不似亦料ら。障りも。他所宿
とと換るふ至れ。猶教ま。渾不似の。是も。思ひ。這樂
器の。古寡。と。思ひ。弄の。恥と。知ら。者。と。られ。只。ち。折。て。棄
人の。と。い。く。と。盡。掃。遣。と。権。二。郎。左。右。多。會。ら。感。嘆。ま。且。の。先生
意見理るれ。約莫事の。齟齬。時運。の。樂器。の。故。の。わ。の。
とも渾不似との名と憎む。阿甦禪院の彼後の山小瘞めて仁義忠孝四



らりの裡や
こもみ辺に納
本編作者自題

のまじ



曾財良上酒平

假た手記

玉石堂下川巻十四

八

文芸堂藏

玉石堂下川巻十四

文芸堂藏

遠ければ一たびのまゝ對面致されども名告まう共立地にお疑ひの解ぬべし況我
 女兄窓井の方の寄もあまざる書翰は在りその他正表證據あれども人信
 ぬ透與がさる在下今恥と又心びて身單かゝて事身より一言一朝小盡せざる
 ありま惜地の對面を願ふのまゝとのお老僕にあらる果て然らばお趣と備の
 御前にお望え上へ姑且俟せぬと心て馳て奥へ退りて又遠くお老まゝ小雪
 太ふち向ひて和殿の稟さる趣を主君御母子にお望え上へ對面せんと宣ふ卒
 這方へと先お立て庖福門より案内をまゝ二回袂三回隔る編室お俱しとも
 不にお當家の老母大刀自其子範的と共侶既お上坐お居て小雪太が東ぬる
 見て贖物といふ夢も知る色白くして儂像ある十六七の青年見るれば毫も疑
 ふあろろ是へくと招き寄されが小雪太の阿とぞろろ遙お膝の頓首して頭を招
 けぬるまゝ老僕も疾那方へと連りお請を已られ小雪太のぬるやふあやふ

そ席お執りて大刀自親子と三拜多寒暖と陳恙るを祝されが大刀自
 涙漣て誠にお思ひかけらる今日位六郎お訪れんと曾根見ら觀音寺殿の權臣
 ぞ女兄の窓井共侶の王君の見は浅らむも扶祿も亦置かざると豫言しお似
 づもる死の靈々たる身單きてあまら必故あらん少年輩の習俗おて浅妻船の
 浅まら恋おその身も果せ依秘さ告上甚麼をいひければ小雪太差屈ひ
 蹴然と老を答やう不自然な浮きとあはれお主人公も御召れお本月初旬意外の
 禍鬼起りしより兄宗委七鹿山を同士敷し陣致ある在下も亦冤屈の罪
 ぬ久多々獄舎お敷かれしと慥お女兄の資助し追放せられぬ首首といふ箇様
 箇様尾の亦如此々々んと長橋象船兩近習の多大江峰張主僕の高嶋石
 見人の哀まも宗委健宗の身お於て有つ始末お直丘実を交へて説話り
 又いなり兄宗委の陣致は貳あるあ奴們を其又除を欲する忠義をた高嶋

のり。智計も有久小はえ。然るに軌的慢小受飲びて。憑く思ひひり。左右も程ふ。
 端々の佳即ふ。ぬるの早朝より午過ぎるまで。鋪野の家例ゆく。種々の祝儀あり。
 既ふし。その果る。未の時候より軌的の昔。蒲酒と酌ん。南向の書院の
 居り。小雪太と上客。鬼刺蒔。三居。梁鐵持。隈八刺。高多とゆり。酒盃を
 せん流を程ふ。王從齊一笑。局ふ。入る。千春萬秋とを祝。ける。中。軌的の單益
 可。嘆息あり。一聲。呀と叫び。小雪太。ち。敬馬。て。故。請。向。軌的の
 額。と。押。て。慨。然。と。く。合。て。る。我。己。が。遺。恨。あり。我。威。勢。と。と。然。と
 報。索。する。其。の。情。慾。お。起。れ。之。の。故。の。憤。憤。の。遣。方。る。て。色。お。出。け。ん。憶。を
 嘆息。あり。と。小雪太。點頭。て。何。や。思。ひ。い。ふ。然。る。の。美。お。脚。心。と。苦
 事の。大人。氣。る。非。如。領。王。の。威。勢。と。報。ひ。が。然。然。と。計。策。と。旋。ら。情。慾
 も。亦。憚。る。の。る。公道。と。借。て。拉。く。何。て。の。隙。没。る。や。の。情。由。仰。せ。られ。こ。い

まして軌的。笑。小。を。憑。く。の。る。の。る。我。口。親。う。ち。空。入。面。伏。之。苛。之。隈。八。
 始。り。と。復。頭。末。と。都。美。知。の。者。多。我。為。説。示。と。の。奇。之。隈。八。を。心。
 多。共。侶。小。雪。太。小。告。て。の。る。近。江。の。郎。君。團。召。れ。當。任。君。の。送。恨。の。修。圖。
 様。箇。様。小。い。と。始。鋪。野。軌。的。が。旅。宿。の。處。女。拔。と。美。亦。と。韓。錦。樞。二。郎。を
 媒。妁。中。て。喜。お。せ。多。く。欲。ふ。其。其。竟。小。成。ら。れ。樞。二。郎。の。母。と。の。け。ん。件。の。父。女。と
 追。け。小。余。後。脆。く。和。睦。を。惜。地。小。宿。野。引。入。て。己。が。妻。小。あ。う。と。の。風。聲。あ。り。の。ま
 ても。叫。び。告。て。又。の。奇。韓。錦。奴。中。已。ち。坐。角。力。の。送。恨。あ。れ。婿。と。の。の。る。由。中。夜
 い。ぬ。る。日。腹。心。の。奴。隸。と。他。奴。が。宿。所。と。撈。せ。小。拔。と。那。里。飲。遣。一。た。飲。餘
 中。飲。今。の。那。里。小。居。ら。む。の。殿。の。送。恨。の。只。是。の。と。告。れ。軌。的。の。鼓。耳。と。低。り。
 韓。錦。が。家。の。食。客。の。拔。と。父。女。の。と。大。江。峯。張。と。飲。吸。做。一。た。撈。麻。葉。の
 も。還。留。と。れ。既。小。他。御。立。去。け。ん。昨。今。の。見。え。と。告。る。大。江。峰。張。の。健。宗

彼の十六郎の罪を饒して誘ふ小利とて其我為小侯見小做りて件の秘事とて
 下他より外小其人とて小雲大點頭てを究竟の役者之術と謀せぬを
 其期のみを意に属れ苛之隈公三俱小感服をるけは這時月敬於曉昏
 近くよりか範的は是まんと侍婢等と召上きて不盤盤と執斂めさる程小苛
 三と隈ハと壽と陳恩と謝を退きまてけり範的急小喚留りて若等外小退
 るる小獄吏小下知りて罪人自目寫十六郎と内庭牽入れさせられたる
 苛云々の阿と忠で隈ハと共侶外外面投て退出けり然れは範的の件の准備の
 為小單後堂退れて錦囊小容る短刀と腰刀と麻衣と親携て出くる
 故の席小坐せと口又小雲太とち譚小入相の鐘高く響きて折口なる揚
 柳の梢小五日の月灰小見え吹風涼きなり時候獄吏の士郎小捕索縛て
 牽りて棧廊の下小推居て云云と受え上れ範的の見々點頭て獄吏小向ひ

これ其の如何なる事とて我其十六郎の所要の若先退れ後小知るやと云ふと小獄吏の
 るる捕索の端と備る松の幹敷留て辭して儘退りけり當下鋪野
 範的小雲天小燭を秉せ端近き程小雲太の灯光の件の次見十六郎
 たりとも熟く相小凄まはる大漢之曩小彼美濃路を我身と酷く蹴
 仆と物餘波る奪畧る大漢小肖れ訝りる左さま右さま又よ見れ
 吭ありける便毒の迹までも実小其奴るけははなれ何と云ふ足れて口
 居り十六郎も亦眼敏く小雲天と瞻仰て舌を吐胆と淡してを思ふ
 送小問ふ時宜るね黄蘗と吐り唾子の如く或は棲違の遊戯小似て二句
 も出む黙然と有友と云知るよりも範的の依然と十六郎小向ひて
 盗見美れ若積悪の最まる律小於て免さる首刎死奴るれも我小大
 事の所要あり若きのをせしめ果さば彼罪を免さるるら賞禄を宗依

斯くも段あり。出入付契と何れ共只六の儘小五百身の暇とあり。と應て流て
 庭門より蚤も出ておれけり。秘策既小果一かた軌的は是もあより。奶々小告て欲え
 とを馳て後堂退り。か小雲天の客房小退て單熟々思ふ。那覺十六郎の
 我身の冤家でありけり。知らぬものいひながら。怒小郡司殿小彼謀と薦ゆより。彼
 奴の罪と饒されて反々一脚屬れり。盗小糧と齋一鱗言。又と貸より。酒思會ま
 る所為る悔。なるとあてけり。と臍を噬めども。その甲斐なけれ。更ふ又思ふ。離合
 前より料がさる。彼美濃路と撞見した。剪徑小まら。今茲少。不測小再會。あ
 ぬる上。伍號と又茲とて撞見。折もあら。飲其頭の障り。さる。回小早。他御走
 る小あり。と尋思とあつ。次の日より。大刀自小壁訴。訟まる。毎小武者。修行小假桂。て
 盤纏二百金を乞。か大刀自い。か許ま。死。你。智恵あり。才覚あり。我ま。でも茲ふ
 居て。我兒の補助ふ。り。ね。か。介。る。時。範。的。も。必。反。々。酬。ふ。も。武。者。修。行。と。る

正か。と禁めて。聴。べ。く。も。あ。る。を。れ。小。雲。天。の。困。果。て。情。地。小。胸。と。苦。め。る。不。題
 韓錦樅二郎。い。ぬ。る。日。防。守。父。女。と。大。江。王。僕。を。出。遣。り。と。詞。敵。あ。ら。ぬ。り。と。り
 心。左。右。小。樂。一。か。ら。ね。武。藝。の。指。南。も。懈。り。克。て。俟。べ。又。生。憎。小。八。重。作。も。ま
 妙。義。よ。り。か。へ。る。末。ど。四。月。の。果。て。是。暑。引。増。五。月。五。日。あ。り。け。り。あ。の。日。見。越。松。時
 八の家子の初幟の壽祝。置酒御食饌の儲あり。と。師。の。韓。錦。と。請。待。せ。か。ら
 樅二郎。已。と。し。る。未。下。刻。より。と。他。が。宿。所。へ。赴。け。押。繪。へ。單。留。守。ま。在。り
 既。小。く。見。暮。て。初。更。の。過。ぬ。ら。と。思。ふ。時。候。外。面。小。咳。込。と。苛。め。け。る。大。漢。折。を。押
 後。找。入。り。と。大。哥。の。宿。所。在。る。故。と。向。ふ。と。押。繪。見。か。り。と。否。家。兄。の。他。へ。取。ぬ。か。へ。さ
 の。程。の。料。り。が。る。用。事。あ。ら。明。日。亦。來。ま。と。の。い。ひ。を。听。き。大。漢。の。訛。る。聲。と。あり。ま。り
 然。ら。是。と。届。け。ま。わ。ら。と。御。高。小。大。哥。小。逢。一。時。あ。る。大。切。な。物。を。和。郎。我。宿。所。へ。の。く
 ぬ。て。我。女。弟。小。信。と。遞。與。ま。と。頼。れ。れ。ぬ。と。申。ふ。け。り。と。の。い。ひ。を。登。ら。投。お。ま。り。短。刀



たけゆね

おふあきみつさ
鬼薙 荷三郎
途小 権二 郎
と 捕んとを
去の序のち文次のおきき
五十五回のとめおきき

三十一回三十一日

文次のおきき



おきき

五十五

三十一回三十一日

文次のおきき

おをちらむぎん錦の囊入れさし押繪の見つ訝りてそを然るともあつた家
 ね留守のふりて奴家が受さるもあらぬ明日出更しとて来ぬといふ心
 みるるも身と肉めつてゆくもいと押繪の透さる追携なりと辱れ俟ねと呼留
 とも折らる白平圍る那地おれん影さ見えぬ音のひかひあるとるけれど押
 繪ハ卑味たる門の戸鎖て兄の如さを今飲々と候程に夜猶深て子二時候縦
 二郎の装束酒の酔いも醒ねの踉蹌々から来けるを押繪の軀て扶入れて却大
 屏の云云と告て短刀を見せまきまふ縦二郎のくも見せると今急小見ま
 るわ我の水を飲ま欲き汲りて来よといそせし押繪の只得指燭して庵漏
 へと立程小縦二郎の俟間もろろ臑と枕小醉臥て軒の聲のこ高るける是より
 後の亦下回小解ん看官先右の綉像と聞せも其大槩と知らんか。

新局玉石童子訓卷之二十四終



